

Title	森雅子君提出学位請求論文審査要旨
Sub Title	
Author	
Publisher	三田史学会
Publication year	2000
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.70, No.1 (2000. 9) ,p.123- 128
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20000900-0123

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

森雅子君提出学位請求論文審査要旨

論文題目『比較神話学試論—古代オリエントと中国—』

論文審査の要旨

森雅子君の提出に係る学位審査請求論文『比較神話学試論—古代オリエントと中国—』の構成は下記のとおりである。

はじめに

I. 西王母の原像—中国古代神話における地母神の研究

II. セミラミスと西王母

III. 后羿叙事詩の復原

IV. ギルガメシュの末裔—羿・靈均・スサノヲ

V. 穆王讚歌

VI. 捨て子伝承の系譜—朱蒙に関する一考察—

VII. 黄帝伝説異聞

VIII. 女媧原始—結論に代えて

補論 崑崙伝承起源考

古代中国は文献資料の豊富さにおいては世界に冠絶するが、こと神話資料についていえば至って貧困であり、このことが神話研究の進展を阻んできた。すなわち古代中国は体系神話を欠くばかりでなく資料が寡少で断片的であり、そのうえ往々にし

て換骨奪胎されていて、本来の姿を容易に窺知しがたく、このことが研究上の障碍となってきたのである。尤も、近年の考古学・民俗学・文化人類学などの新しい研究成果を補助資料として、その欠を補うことによって中国神話研究はそれなりの成果を挙げつつあるが、それには神話資料そのものの貧弱さとともに復元と解釈上に自ずから限界があるのが実情である。

本論文は「はじめに」においてまずこの点を指摘したうえで、その限界を克服するためには、比較神話学的方法に拠るべきこと、とくに古代オリエントの神話群との比較によって中国古代神話の復原を試むべきことを強調する。ただし、それはかつての一元論的な汎パピロニア説ではなく、比較神話学の伝播論と現象論の二つの観点に立ち、対応する個々の神話との精緻な比較対照によつてはじめて可能になること、これによつて、ややもすれば閉塞的な中国神話研究を打開し、新しい道を拓くことが可能になることを説いている。

I 「西王母の原像—中国古代神話における地母神の研究」において、『山海経』、『莊子』、『穆天子伝』、『列子』等の各種文献にごく断片的でかつ一見相互矛盾する多様な神格の持ち主として登場する西王母の本質を論じている。この複雑多岐な西王母の神格については、従来この神が時代の推移とともに変貌したためとする「西王母の変貌」説が学界の主流であった。本章ではその変貌は西王母が地母神であったがゆえに顕示し続けた諸特性・機能であったという解釈を提示している。この仮説を立証するために、まず第二節でアナトリアの大女神キュベレー

をとりあげ、山岳神、百獣の女主人、両性具有神、あるいは治癒神でしかも疫病や飢餓をもたらす凶神であるキュベレーと西王母とがもつそれぞれの神格、神性に多くの類似が認められることに説き、ついで第三節でウガリット出土のバアルとアナトの神話群の中のアナト神と西王母とを比較し、死の女神・女戰士・王権の守護神としての神格・神性等を共有していることを指摘する。さらに第4節で性愛、豊穰、多産を司るシユメールのイナンナに注目し、この神が国家の繁栄を祈願する「聖婚」の儀式で、地上の支配者の花嫁としての役割を演じたというクレマーの説を採りあげ、西王母が同じような神格をも具有し、かつ『穆天子伝』の中で描かれた西王母と周の穆王との交歓に穆王との「聖婚」の面影が認められることを論じ、第5節でこれら古代オリエントの三柱の地母神と対応する諸特性を断片的ながら顕示する西王母の本質が地母神であったことを、現象論的に説いている。

II 「セミラミスと西王母」では、かつて小川琢治が「クテシナス其他の希臘人が西方へ伝えたバビロン城建設者のセミラミスの伝説が中亜を経て東方へ伝来し西王母となった」といったん推測しながら後に撤回した説を復活させ、これを掘り下げてその可能性を説くことによつて前章Iの自説を補強した。西王母は古く殷墟卜辞中に西母として現われ、その後姿を消し、戦国時代になって西王母として再登場することを指摘し、他方アッシリア宮廷において絶大な勢力を振るつた王妃サンムラマツト、のちのセミラミスが、前5世紀はじめのヘロドトス、

ディオドロス、ストラボン、降つてモーセス・ホレナツイ等が記録した伝説に、オリエント世界の高名な地母神たちの神的諸要素やこれらに関わる祭儀を吸収して、彼女自身が地母神として再現していることに注目し、バビロンを中心とする地域に伝承されていたと想定される彼女の神話伝説がシルクロードを往来した隊商達によつて東方に伝えられ、西母つまり西王母の伝説や信仰に習合した。その習合を可能にしたのはほかならぬ地母神としての神格にあつたであろうと説いている。

III およびIVでは「ギルガメシユ叙事詩」をとりあげ、世界最古の叙事詩の主人公ギルガメシユがセミラミス同様に東漸して中国世界に伝えられた可能性について論じた。まずIIIの「后羿叙事詩の復原」では『山海経』、『楚辞』、『左伝』、『淮南子』等の中に散見する羿は矛盾する正と負の双方の神性をもち、それゆえ古来「善い羿」と「悪い羿」とが存在したとする羿二人説乃至複数説が唱えられてきた。しかしその羿をアッシリア語版『ギルガメシユ叙事詩』の中のギルガメシユと対比させると、きわめて類似性に富んでいることを指摘した。すなわち両者の生涯——半神半人としての誕生、善悪を併わせもつアンビヴェイレントな性格、怪物退治の活躍、神々による拒絶と排斥、不死の探究とその失敗、そして人間としての死に至るまでの足跡がよく吻合し、しかもさらに両者が不死を求めて旅を続ける途中で出会うマーシユ山と崑崙山、それぞれの門を護る蠍人間と開明獸、寶石の実る地上の楽園に関する共通の描写に至るまで偶然とはいひ難い類似が認められることを列挙して、羿

伝承はギルガメシユのレプリカとしての性質をもっているといふ。そして最古の叙事詩の主人公の伝承が羿の射日神話に習合し、それが肥大化して「后羿叙事詩」とでもいふべき古伝承が成立した可能性を古文献に散見する関係資料を通じて推測している。

なお補論の「崑崙伝承起源考」は西王母の住むとされる崑崙山の伝承は古来の山岳信仰にメソポタミアの古代都市バビロンの伝説が習合してできたことを説いており、I、II、IVおよび後掲のV章などの自説を補強している。

ついでIV「ギルガメシユの末裔——羿・靈均・スサノヲ」では戦国末期の『楚辞』『離騷』をとりあげ、主人公靈均、彼の主君靈脩、彼に道を説く女嬃、彼が求愛を試みた女性たち、そして神巫の靈氣や巫咸にもギルガメシユ叙事詩の影響を見ることができると主張する。たとえば靈均と靈脩に認められる常軌を逸した主従関係——さながら異性に対する執拗な恋情のように繰返される繰り言や往生の悪さは、ギルガメシユが友人であり忠実な従者のエンキドウの死に際したエピソードを彷彿させ、さらに靈均の姉と推定される女嬃がシドウリと、彼が一度は求婚しながら拒絶した宓姬が女神イシユタルと、彼の守護神もしくは予言者として機能する靈氣や巫咸が太陽神シャルマシユと、長寿を誇る彭咸が不死の人ウトナピシユティムと、それぞれ対応するなど、戦国楚の詞華集にギルガメシユの影響があったと説き、さらには、この世界最古の詩集が西方のギリシアではヘラクレス、アキレウスやオデュッセウスに、東方では羿、靈均

などの英雄の出現に、さらにはわが国のスサノヲにも影響を与えたと主張する。

V「穆王讚歌」では、ウル第三王朝二代目の王シュルギ（前二〇四六年まで在位）に関する粘土板テキスト、就中その「シュルギA」との照応によって、奇書『穆天子伝』がその影響によって生まれた可能性を指摘する。シュルギは旅に異常な関心を示し、シュメール全土の道路網を整備し、自らスピード狂をもって自負したが、彼が試みた旅の目的の一つが豊穡と多産の女神イナンナとの「聖婚」儀式を執行し、彼女から祝福を約束させることであつたと説き、この伝承が東伝して、夙に「旅好きな天子」として著名な西周王朝第五代目の穆王伝承に習合し、かつイナンナと地母神西王母とを同一視することによって、西王母に会うためにはるばる西方へ旅を続けて「聖婚」を執り行ない、その祝福をうけるという穆王讚歌の伝承が形成され、それが『穆天子伝』という読誦韻文形式の書に熟したと推定する。

VI「捨て子伝承の系譜——朱蒙に関する一考察」では高句麗の建国の始祖・朱蒙をとりあげ、その捨て子伝承が前三千年紀後半のアツカドのサルゴン一世伝説にまで遡ることを論じた。サルゴンにまつわる世界最古の捨て子伝承は、のちエジプトからイスラエル人を率いて紅海を渡り、カナアンに導いたモーゼの出生譚に採り入れられ、さらにファラオの宮廷での成長や卓抜した才能ゆえに嫉まれて迫害を被るエピソード、また死に臨んで昇天したというモチーフが付け加えられ、その後西方で

はギリシアやローマの神話、さらにアーサー王伝説やゲルマン神話に影響し、その一方でインドのマハーバーラタのカルナにその影響をとどめたのち、中国にも伝播し、断片的な形ながら周王朝の始祖・后稷の捨て子伝承や穆王の干将の子、赤比の伝説にその痕跡が認められるなど、周辺世界に広まったとする。とりわけ朱蒙伝承はその特殊な出生と捨て子のエピソード、異常な成長振りとそれを嫉妬する人々による冷遇、さらに出奔の途中の渡河の奇蹟、そして協力者による新天地での建国、さらに死をめぐるエピソードなど、伝承の構成と重要な諸モチーフやエピソードを共有しており、高句麗の始祖神話はサルゴン、モーゼの捨て子伝承の影響のもとに成長したことを指摘している。

Ⅶ「黄帝伝説異聞」では、「黄帝と蚩尤の戦いがティアマトとマルドゥクの闘争に類似する」が、ただし「それを生み出すべき類似の宗教儀礼の背後における存在を想定させる」ものであって「それがただちに神話伝説の直接あるいは間接の伝播として説明できない」とする貝塚茂樹説あるいは鉄井慶紀等の論から踏み込み、両神話を子細に分析比較するならば、黄帝の農耕神・太陽神・治療神(呪医)・戦神・創造神などの神性や機能はマルドゥクのそれらとよく合致するばかりか、両者が四目の持ち主であること、黄帝の家臣・蒼頡(または黄帝自身)とマルドゥクの息子ネボがともに文字の創始者であるとされていることなどその属性や関連する伝承にも少なからぬ共通点が認められることを指摘して、黄帝伝説の成立にバビロニアのマル

ドゥク神話からのつよい影響が認められるとする。

Ⅷ「女媧原始——結論に代えて」の第1節で、原形を容易に把握し得なかつた女媧に関するこれまでの諸研究の方法論を批判し、現象論的比較神話学の方法によってはじめてこの女神の本質を窺知することが可能であるとし、第2節以下で具体的な比較に入り、まずバビロニアの宇宙開闢神話エヌマ・エリシュに登場するティアマトが海の女神、原始の存在、至高の女神、神々や怪獣・怪物の母等の神格をもつ、竜蛇の姿態をした万物創造の造物主であることを指摘し、ついで第3節でこのエヌマ・エリシュの神話が周辺世界に伝播し、シリアのウガリットではバアルとアナト神話群の中のアシエラ神にその痕跡をとどめ、さらに第4節ではギリシア神話のエウリュノメー、テーテュス、ガイア、ヘラがそれぞれティアマトのもつ神格の神性の一部を継承していることを個別に論述する。そして第5節では『楚辞』『天問』、『山海経』の諸篇等に伝えられている女媧が、上記オリエントやギリシア神話の女神達のもつ諸特性を伴わせ具有し、かつそれらを発展させた神格、神性、機能の持ち主であった可能性のあることを指摘し、この女神の本質は中国世界の諸資料のみにとらわれることなく、西方古代世界の女神たちの顕現した諸特性との比較によつてはじめて解明できるところを説き、最後に閉塞的な中国古代神話の研究は、上記してきたように、世界的視野に立脚した現象論的比較とより直截な伝播論的比較を併用することにより、旧来の汎バビロニア説では打開できなかった新たな展開が可能であるとした。そして更に

客観性をもたせるために比較の対象世界を拡大するとともに、かつて西方から伝来したとされる戦車等の物質文化や占星術・天文学等の諸科学・文化等の比較をも含めた複合的、歴史学的研究を進める必要を内省し、本論文の題名を「比較神話学試論——古代オリエントと中国」とした所以を附記している。

以上、各章の内容を概観したが、次に本論文に対する評価を述べる。

本論文の題名が示しているように、著者は古代中国と古代オリエントの神話を比較するという方法によって、断片化したり、その正確な意味が失われてしまった中国の神話を復元しようとした。そのための著者の永年の努力によって、両地域の神話の比較は広範囲のものとなり、神々や神的存在、また神話の物語りやそのテーマ、さらにモチーフが組織的に明らかにされたと云うことができよう。実際、個々の神々や神話的テーマについては、著者よりも前から、また本論文の各章が書かれている間にも、主として日中の研究者による両地域神話の比較研究がなかつたわけではないが、本論文はそれ等に対してはるかに総合的・体系的であり、この分野において画期的なものと評価してよいであろう。勿論、二〇世紀初頭のヨーロッパにおいては、当時までに明らかにした古代オリエント、とりわけメソポタミアの神話や叙事詩と世界の他の地域の神話を比較し、前者から後者への神話の伝播を描く汎バビロニア説が行なわれ、本論文の著者も自らの立場を「一種の汎バビロニア説」と称してい

る。しかし、かつての汎バビロニア説の学派は神話が断片化している中国を記述や研究の対象とすることはほとんどなく、まして比較という方法によって中国神話を復元するということは試みなかつた。従って、著者によるオリエント・中国神話の組織的比較研究はかつての汎バビロニア説の単なる摸倣ではなく、著者独自のものであると評価されるべきであろう。

著者が本論文の中で用いた比較神話の方法は現象論と伝播論である。前者は直接の歴史的交流を伴わない両地域間神話の類似現象を両地域の古代資料の中に採り、該当する中国神話の意味を解明しようとするものである。これに対して、後者は古代オリエントからの神話や神的存在の中国への歴史的伝来を前提とし、該当する中国神話を復元し、その起源を明らかにしようとする。

現象論が適用されるのは、中国の神々の中で西王母と女媧と呼ばれる地母神たちであり、彼女たちはオリエントの地母神たち、すなわちイナンナ、アナト、キュベレーとその神性を比較されるばかりでなく、場合によってはギリシア神話中の古い女神たちも引き合いに出される。中国のものである、オリエントやギリシャのものである、これ等の地母神は著者自身認めるように、先史時代の母権社会に根づく女性原理の神格化された存在であり、そのような根源的存在は伝播論よりも現象論で扱うのがふさわしいと云うことができよう。著者は現象論を適用するのは両地域の神話が大枠で一致する場合であり、それに対して伝播論は両者が細部まで一致する場合であると述べている

が、どちらの方法を用いるかはそのような形式的レベルの問題ではなく、そこにはより根本的な区別があると思われる。

伝播論はこれに対して、主として所謂シルクロードを經由してのオリエント神話の中国伝等に関して適用される。すなわち、西王母、羿、穆王、朱蒙、黄帝などの神話的存在の形成過程、とりわけこれ等の存在についての伝説や叙事詩の誕生におけるオリエント神話の役割が解明されている。その中には朱蒙のような高句麗の建国者や崑崙のような地名が扱われる場合もある。著者はこれ等の比較論において単純な一方的受容を主張しているのではない。例えば、シユメールの『シユルギ王讃歌』の影響が及ぶ前に、必ずしもその実態が明らかにされていない憾みがないわけではないが、プロト穆天子伝の存在を想定するなど、慎重な史料の取り扱いが行なわれていると認められよう。最後に、本論文の内容や立場について若干の疑問点を挙げておく。

上記の通り、著者は汎バビロニア説を自らの学説の祖として挙げているが、著者の用いる現象論と伝播論という方法は著者独自のものと云ってよく、それを汎バビロン説にまでさかのぼらせる必要はないであろう。それに反して、著者は先年、河南省で発見・採集された所謂「中原神話」や現在中国の少数民族の間で伝わる神話伝説の神話研究上の価値については多少とも懐疑的である。その理由は現代までの長期の間に古代神話は大幅な変質を遂げているという点にあるようであるが、著者が用いる史料自体にも長期にわたる神話の変化を認めなくてはなら

ない場合があることを見ても、「中原神話」や少数民族の伝承を過小評価しすぎているように思われる。また、著者は中国古代やギリシア・ローマの文献、『穆天子伝』や『ギルガメシュ叙事詩』、『ウガリト神話』、『エヌマ・エリシュ』、『シユルギ王讃歌』などの出土資料を縦横に活用し、その利用法は巧妙であると云うべきであるが、これ等諸資料並びに随所に採用している文献の史料批判において尚一層の厳密さが求められる場合もなしとしない。

このような課題が残されているとは云え、本論文はオリエント、ギリシア、ローマ、中国という広範な地域の資料を博搜し、確かな比較神話学的、歴史学的方法にもとづき、斬新な視点に立脚しつつ、古代神話の諸相の解明に向け、本格的に鑿錘を入れた優れた業績である。本論文は多くの点で高い評価を受けるべきであり、著者森雅子君は文学博士の学位を取得するにふさわしいものと判定する。

論文審査担当者

主査	慶應義塾大学文学部教授	文学博士	小川英雄
副査	慶應義塾大学名誉教授	文学博士	伊藤清司
副査	学習院大学文学部教授		吉田敦彦
学力確認担当者	慶應義塾大学文学部教授		山本英史